

ちょっと ブレイク しませんか？

第 53^P 回

エジソンズ・ゲーム (2017年 米国)



イソップ寓話集に「造船所のイソップ」と題する小話がある。ある時、寓話作家のイソップは暇つぶしに造船所へ入って行った。船大工たちが彼をからかって、言い返さずにはいられないように仕向けたので、イソップはこんな話をした。その昔、カオス*と水が生じたが、ゼウスは土の要素をも出現させたいと思って、三度海の水を呑みこむよう大地を促した。大地は仕事にかかる、まず最初に山々を現し、再び呑みこんで平野をも露出させた。「もしも大地が三度目も水を呑み干すことを決心すれば、お前たちの技術は何の役にも立たぬものになるのだぜ」

*カオス：天地自然万物の創世に先だって生じた原初の空間。ヘシオドス「神統記」116以下によると、最初にカオスが生じ、次いで大地（ガイア）と、地の奥底のタルタルスと、美しいエロスが生じた、という。

舞台は1880年の米国、電気で「夜を葬る」と宣言した男を主人公にした「エジソンズ・ゲーム」は電気や電機に詳しい人には身近な作品かと思う。発明家兼実業家のウェスティングハウスはウィリアム・スタンリー、ニコラ・テスラら天才的技術者を擁し交流、特に三相交流発電電による電力事業を開拓しその技術を確認した。白熱電球の事業化を成功させたトマス・エジソンは天才発明家と崇められていたが、頑固で傲慢なところもあった。裕福な実業家ウェスティングハウスは、大量の発電機が必要なエジソンの直流送電方式より、遠くまで電気を送って安価な交流送電方式の方が優れていると考えていた。若手発明家テスラも効率的な交流の活用を提案するが、エジソンは全否定。そんな中、ウェスティングハウスは交流での実演会を成功させ話題をさらう。そのニュースにエジソンは激怒し、十分な科学的根拠もなく交流による送電方式は危険で人を殺すと非難する。かくして世紀の電流戦争が幕を開ける。訴訟や駆け引き、裏工作が横行する中、ウェスティングハウスはエジソンと決裂したテスラと仲良くなる。結局、送電戦争ではエジソンが敗北する。送電は世界中何処でも交流方式だ。交流だと死刑に使えるというエジソンの振る舞いも奇妙だった。資金が途絶えると新規開発も出来ないというモノ作りの野望と苦悩もひしひしと伝わる作品だった。

テスラを主人公にした「テスラ エジソンが恐れた天才」(2020年 米国)は、その裏面史的な作品だ。今日の携帯電話、車の自動運転に繋がる天才ニコラ・テスラの発明に、スティーブ・ジョブズやオバマ元米国大統領が賞賛したという。

19世紀末、人々の生活を一変させたのは白熱電灯の発明だった。本作は、動力源を制するものがビジネスを制する時代の幕開けを生き生きと描いている。エジソンはGEの創業にも寄与し歴史に名を残したが、テスラの最期は不遇な孤独死だった。それから百余年、人類は大加速により人新世に突入した。ガイアの夜明けも大きな壁に突き当たり、地球の地圏、水圏、大気圏、そして生物圏は代謝循環している有限空間だと分かった。

イソップは「もしも大地が三度目も水を呑み干すことを決心すれば、お前たちの技術は何の役にも立たぬものになるのだぜ」と語ったが、海(水圏)がなければ船は無用の長物で、沈没事故で人が亡くなることもない。だが、そもそも海がなければ生命の誕生はなかった。だからこそSDGsは海を守る、健康を守る、と謳っている。イソップは思いつきなのか、炯眼だったのか？!



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長